都道府県番号	４４
都道府県名	大分県

（①□　②□　③ ▽ ）

Ⅰ．学校名及び規模

蒲江町立楠本小学校										
	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数	
学級数	1	1		1		1		4	5	
児童数	3	7	3	3	6	5		２７		

Ⅱ．実践研究の概要

・主題

確かな学力を身につけた子どもの育成

～一人ひとりに応じたきめ細かな指導のあり方を求めて、国語科を中心に～

・テーマ設定の趣旨

今日、学校教育において、教育課程の実施に伴う教科の時数の削減や学力テストの比較などから、学力低下が懸念されている。今回の学習指導要領の改訂では、「社会の変化に主体的に対応できる能力を持った心豊かな人間の育成」「自ら学ぶ意欲を高める」「基礎的、基本的な内容の重視」「個性を生かす教育の充実」などの基本方針が示されている。本校は、学力向上フロンティアスクールの指定を受け、まず、学力についての共通理解と、子どもたちの授業での様子や学力検査結果の分析を行った。

確かな学力を「基礎基本の力の定着」としてとらえ、「学ぼうとする力」「学ぶ力」「学んで得た力」の３つの力の総体であると同時に、自らの生活の中で生かされていく力、すなわち、「生きる力」としてとらえた。この視点で子どもたちを見つめ直すと、「これまでの複式学級での学習経験から、与えられた課題は確実にできるが、思考力や判断力を高める活動には慣れていないという傾向がある。」という課題がうきぼりになった。

そこで、少人数学級という特性をいかし、一人ひとりの子どもたちの力を詳細に分析した後に、個に応じた【具体的な目標設定】【評価】【支援】を設定し、学び方が習得できる学習過程の中で「確かな学力」を高めていきたいと考えた。また、全ての教科の基礎基本となる「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」などの場が多く、授業だけでなく、全校の場でも検証できる国語科に焦点をあてていきたいと考え、上記主題を設定した。

Ⅲ．実践研究の内容について

（ｉ）研究体制の工夫

～主題の分析～

「確かな学力」とは

「学ぼうとする力」「学ぶ力」「学んで得た力」の定着と高まりを意味する。

本来ならば、全ての場において研究を深めていかなければならないが、１年次は、児童の分析を行った結果、まず、「学ぶ力」に重点をおいて取り組んでいくことにした。

～研究仮説（授業研究とその他の教育活動の場の二本立て）～

学び方がわかる学習過程を設定し、課題が明確で主体的に取り組める授業、及び、他の教育活動の場で、それぞれの特質を生かした指導の工夫や適正な評価活動を行っていけば、子どもは自分に自信をもち、確かな学力が身につくであろう。

～仮説の分析～

「学び方がわかる学習過程を設定し」とは

学習過程の中に、課題をつくる場（出会う場）・解決への見通しを持つ場・考えを持つ場（まとめる場）・考えを表現する場（話し合いの場）・考えを深める場（選択する場、広める場）・自分や友だちのがんばりを認める場などを設定し、学習を進めていく。この学習過程を繰り返し行うことで、一人ひとりに応じた学習過程が成立していくであろう。学習の見通しを持てるようにすることで、学び方を習得できていくのではないかと考えた。

「課題が明確で主体的に取り組める授業」とは

興味をもった学習課題を生活の中の場面におきかえることができた時、換言すれば、既習の知識や体験活動で得た力を生かせた時、子どもたちは、生き生きと目を輝かせ、「考えてみたい。」「挑戦してみたい。」という思いを強く持つであろう。時には未知の内容もあるだろうが、子どもたちの姿勢がグッと前に出てウンウンとうなづきながら課題を追究しようとすれば、明確に課題をとらえることができたと判断する。

「適正な評価活動」とは

適正な評価活動という言葉の中に、補充的な指導・発展的な指導を含んでいる。適切な評価活動を学習過程の中に位置づけ、その評価をいかした補充的な指導・発展的な指導を行う。少人数学級の特性をいかして、どんな内容を組んでいくか、教材開発とともに研究していく。

また、国語科では、「できた」「できなかった」「力がどれだけついたか」などが、見えづらい面がある。評価の方向や方法についても今後の研究課題である。

「子どもは自分に自信をもち」とは

一人ひとりの子どもたちが学習の喜びを味わい、感動や達成感とともに自分を見つめ直し、さらに自信を持って学ぶ力を高めていくことである。そして、学んで得た力を生活の中で生かしていってほしいと考える。

（ⅱ）実践研究の内容（ ア 授業における評価活動　　イ スキルタイムにおける評価活動 ）

ア 授業における評価活動

・子どもの実態の分析と単元を通して期待する姿を設定し、評価規準・評価基準を作成する。
・１時間ごとに学習と評価の流れを記入し、活動をしっかりとふり返りながら子どもの力を高める。

【評価規準の作成（例４学年「笑い話」指導案より）】

〇具体的な子どもの実態及び評価規準（話すこと、聞くこと）
＜評価規準＞　国立教育政策研究所作成
・伝えたい事を選び、自分の考えがわかるように筋道を立てて、相手や目的に応じた適切　な言葉遣いで話している。＜話す、組み立て＞
・話の中心に気を付けて聞き、自分の感想をまとめている。＜聞く、まとめ＞
・互いの考えの相違点や共通点を考えながら、進んで話し合っている。＜話し合う＞
※（　）内の評価は授業前の評価であり、この授業を通して特に期待することを明記した。

	子どもの実態	期待する姿
A児	・内容の組み立てや根拠を考えて、話すことができる。（A） ・大切なことは集中して聞き取ろうとすることができる。（B） ・話し合い活動は意欲的に行うが、相違点や共通点を考えての言動は少ない。（A－B）	・内容の組み立てや根拠を考えて、**順序よく**話をすることができる。（A→S） ・大切なことは集中して聞き取り、**自分の感想をまとめる**ことができる。（B→A） ・**相違点や共通点を意欲的に探して**、自分の**考えをよりよいものにしていく**ことができる。（A－B→A）
B児	・間違えを恐れず、自分の思いをはっきりと言うことができない。（C）	・**たくさんの根拠を考え出し**、自分の思いをはっきりと**筋道立てて話す**ことができる。

【評価基準の作成】（例４学年「笑い話」指導案より）

	A：十分満足	B：概ね満足	C：努力を要する	Cへの手だて
関心・意欲・態度	・**順序性を考え聞き手を意識**した話し方をしようとしている。 ・**自分の考えと比較**しながら聞こうとしている。 ・**相違点や共通点を意欲的に探して**、自分の**考えをつくろう**としている。	・**伝えたい中心を考え**て話そうとしている。 ・**聞きたいことを質問**しようとしている。 ・**話し合いに積極的に参加**しようとしている。	・話すことにあまり意欲を示さない。 ・聞くことにあまり意欲を示さない。 ・話し合いにあまり参加しようとしない。	・学習の流れの確認 ・集中できる話題の提示 ・論点の詳細な補足説明 **※ワークシートの工夫** **・効果的な挿し絵を作成**
	※机間指導での観察・子どもの発言の様子・感想（ワークシート）から把握する。			

【学習内容と評価の流れ（例４学年「笑い話」指導案より）】

※別途資料添付

イ　スキルタイムにおける評価活動

・本校では、毎朝１０分間のスキルタイム（話す・聞く）を実施している。さらに、毎週木曜日の３時３０分から、取組内容・教師の評価・自己評価・相互評価のカードを印刷し、全職員で評価する時間を設定している。

【スキルタイムの内容と教師の評価】　　**【子どものふり返りカード】**

※別途資料添付

（iii）成果と課題

○成果

（授業に関して）

①研究授業で「評価規準及び評価基準」を作成していく中で、評価に照らし合わせて、一人ひとりの子どもたちの実態をこれまで以上に詳細に分析していけるようになった。そのため、単元を通して期待する姿を設定し、支援をしっかりと位置づけて、一人ひとりの子どもたちに接していけるようになった。

②ワークシートの積み重ねから、子どもたちの思考の流れがわかる記録ファイルができている。これは、教師が一人一人の変容をつかむ上で参考となるだけでなく、子どもたちが自分の思考や活動の様子をふり返る中で、次の活動への大きな自信（意欲や目標などの向上）となっている。

③定期的な業者テスト（単元ごと）では、各学年とも国語科の「話す・聞く」の領域を中心に平均点が上がっている。特に、聞き取りに関しては、大切なことがらをメモする力が高まっている。

（他の教育活動に関して ）

①スキルタイムを継続し、毎週全職員で子どもを評価することにより、内容の充実が図られた。一人ひとりの子どもへの支援や評価のあり方を多角的に検討している。また、ワークシートやふり返りカードの充実などについても研究を深めることができた。

②スキルタイムの自己評価や相互評価などで子どもたちが自信をつけ、集会活動後の感想発表では、「進んで感想を言いたい。」と、自ら前に出て思いを語る子どもが増え、今までなかなか人前で話せなかった子どもまでも、積極的にみんなの前で話すことができるようになっている。

③異学年との活動で、高学年はより高い目標を設定して自覚を持ってのぞみ、低中学年はよさを学んで自らを高めようとすることができている。

○課題

①すべての単元で評価基準を作っていかなければならないが、教師の評価・自己評価・相互評価などに時間がかかり、ゆとりがなくなっている。評価の項目数を絞り、評価の方法を多様化していきたい。

②地域の方や保護者が子どもたちの伸びをどのようにとらえたかを把握し、それを参考にしながら、子どもたちの課題とこれからの研究の方向性を考えていきたい。

（iv）成果の普及方策

・学校間地域連絡推進会議　（日時・・・平成１４年１２月６日、場所・・・佐伯教育事務所、
テーマ・・・楠本小での研究経過報告、対象・・・管内研究担当）

（ｖ）その他